

カリフォルニア芸術大学における教育プログラム評価システムの特徴 —デジタルハリウッド大学のアウトカム・アセスメントシステム構築への示唆—

Characteristics of Program Review System at CalArts: Implications for the Establishment of Learning Outcomes Assessment System at Digital Hollywood University

山口 豪 Go Yamaguchi

デジタルハリウッド大学 学務グループ

本稿の構成は概要次の通りである。第1にわが国の大学を取り巻くコンテンツ教育分野の質保証・向上に関する近年の動向を概観し、第2に先行研究レビューを行う。第3にCalArtsの先進的な教育プログラム評価システムの特徴に関し、学習成果の設定・評価、ルーブリック・アセスメントレポート、プログラムレビューサイクル、及び外部評価システムに焦点を当て考察する。第4にこれらの考察結果から、今後コンテンツ系高等教育機関が前述の点に取り組む際の手掛かりを提示すると共に、デジタルハリウッド大学のアウトカム・アセスメントシステム構築への示唆を導く。最後に将来のわが国コンテンツ教育分野の質保証システムの将来像とコンテンツ教育学会の役割を提案する。

キーワード：学習成果、プログラムレビュー、カリキュラムマップ、ルーブリック、実験アニメーション

1. 本稿の目的

近年、わが国の高等教育の質保証・向上に関して、特に①学生の学習成果^{*1}の設定・評価や②プログラムレビュー^{*2}の重要性が着目されている。例えば、中央教育審議会大学分科会将来構想部会(2017)では、「学修成果の可視化と情報公開」が重要な課題として位置付けられ、「各大学が三つの方針に基づく大学教育の質向上に向けたPDCAサイクルを適切に機能させるためには、学生の学修成果に関する情報を的確に把握・測定し(すなわち可視化し)、当該情報を各大学や学部等が取り組むべき目標の設定、目標と現状とのギャップの測定、目標の到達に向けた既存のカリキュラムや教育手法の見直し等に適切に活用することが必要である(37頁)」との指摘がなされると共に、プログラムレビューが重要な「論点と検討の方向性」として「個々の学生の学修成果や各大学の教育成果を、学位を与える課程(プログラム)共通の考え方や尺度(アセスメント・ポリシー)に則って評価し、その結果をプログラムの改善・進化につなげるといふ改革サイクルが回る構造を定着させることが重要であると考えられる(37頁)」との指摘がなされている。

そうした中で、わが国では、工学、薬学、歯学、医学、看護学、及び獣医学等の専門分野別評価はすでに実行に移されており、これら分野の上記①②に関する取組みは進んでいる。また、日本学術会議では、すでに数多くの学問分野で大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準が英国QAA(The Quality Assurance Agency for Higher Education)による分野別参照基準などを参考にして策定・公表されている^{*3}。

上記の動きの中で、コンテンツ分野^{*4}(以下「CT分野」)に焦点を当てた分野特性の上記①②に関する具体的な議論は管見の限り、未だ多くはなされておらず、同分野における高等教育の質保証・向上に関するわが国の取組みは、日本学術会議が対象としていない学問分野であることなどから、他の学問分野と比較して遅れているといっても過言ではない。このような状況に鑑み、今後わが国で、CT分野の高等教育における質保証・向上に向けた取組みを推し進めていく必要があると考える。そして、とりわけ、その質保証・向上を図る上で鍵となる①学生の学習成果の設定・評価と②プログラムレビューを行うことが極めて重要であると考え。それでは、わが国のCT分野の学部・研究科などを擁する高等教育機関(以下「CT系大学」)において、CT分野の上記①②をどのように実施すればよいのだろうか。

その手掛かりとして、本稿では、米国の優れた^{*5}芸術系大学で

あるCalifornia Institute of the Arts(カリフォルニア芸術大学(以下「CalArts」))で実施されている学生の学習成果の設定・評価やプログラムレビューの先進事例を取り上げる。この事例を通して、本稿は、次の3点を導出することを目的とする。

第1にCalArtsで実施されている学生の学習成果の設定・評価やプログラムレビューの特徴を考察し、CT系大学の参考に供することである。

第2にCalArtsで実施されている学生の学習成果に焦点を当てた先進的な教育プログラム評価システムの特徴を考察し、デジタルハリウッド大学及び大学院(以下「本学」)のアウトカム・アセスメントシステム構築への示唆と提案(私案)を導出することである。

第3にCT分野の高等教育の質保証・向上を推進するために、同分野における高等教育の質保証システムの将来像を示すことと共に、筆者が所属するコンテンツ教育学会の役割についての提言(私案)を示すことである。

なお、本稿は、筆者が個人として発表するものであり、所属機関や所属学会を代表して述べる見解ではなく、その内容はすべて筆者個人の責任に帰属することを予め断っておきたい。

2. 先行研究のレビュー

本稿に関連する先行研究について、次の3つの視点からレビューを行う。

第1にCT分野に関する学習成果の設定・評価に関する先行事例としては、英国におけるアート&デザイン分野の卒業生に期待されることを、その卒業生が学習終了時に、何を知り、何ができ、何を理解したのか、という観点から定義したものである英国QAAによるSubject Benchmark Statement, Art and Design, February 2017(分野別参照基準 アート&デザイン 2017年2月)がある。この分野別参照基準には、アート&デザインの優等学位を取得した学生が必要とする達成度の①閾値(最小)レベルと②典型的なレベルを記述するだけでなく、③卓越した達成基準の簡潔な説明も含まれている^{*6}。また、それを実際に利用しているUniversity of the Arts London(ロンドン芸術大学)の事例概要が日本高等教育評価機構(2007)によって報告書としてとりまとめられている。なお、この分野別参照基準については、山口(2018a)において翻訳を行った。

第2にCT分野のプログラムレビューについては、全米のアート&デザイン分野の専門分野別アクセリテーションを担う団体であるNational Association of Schools of Art and Design (NASAD)のアクセリテーションを受審したカルフォルニア州立大学ノースリッジ校におけるプログラムレビューの一部を紹介した未来工学研究所(2009)の事例報告がある。ここでは、同校の5年サイクルで実施されているプログラムレビューのプロセスや手続きの概略がインタビュー調査をもとに整理されている(未来工学研究所, 2009, 100頁)。

第3にCT分野の質保証システムについては、日本高等教育評価機構(2007)において、海外におけるファッション系高等教育機関に係る評価機関並びに被評価機関(大学院等)のアクセリテーションの実態調査がなされ、評価機関としてはNASADのアクセリテーションシステムの概略が説明されていると共に、被評価機関としては、University of the Arts London、The Royal Academy of Fine Arts Antwerp(アントワープ王立芸術アカデミー)、School of Visual Arts(スクール・オブ・ビジュアル・アーツ)、FIT: Fashion Institute of Technology(ファッション・インスティテュート・オブ・テクノロジー)、及びPratt Institute(プラット・インスティテュート)の質保証システムの概略が説明されている。

以上のレビューから、CT分野における学生の学習成果の設定・評価やプログラムレビューに関する先行研究について、その概略やその一部を紹介したものはあるものの、CT系大学の参考に供すべくその内容の詳細を紹介したものは、管見の限り存在しない。また、CalArtsの取組み自体をわが国に紹介した文献も見当たらない。さらに、わが国のCT分野に焦点を当て、その質保証システム全体の在り方について提言を行ったものも見受けられない。従って、CalArtsの学生の学習成果の設定・評価やプログラムレビューに焦点を当て、その内容を詳細に紹介し、CT系大学の参考に供すると共に、将来のCT分野の質保証システムへの提言を行うことを目的とした本研究は、一定の新規性があると考えられる。また、その内容は、今後CT分野での新たな研究の推進や展開に資することができると思われる。

このような理由から、山口(2018b)において、CalArtsのプログラムレビューに関する考察を行い、わが国のCT分野の質保証・向上への示唆を導出した。本稿は、山口(2018b)の研究内容をベースに、そこで示した「残された研究課題」に焦点を当て、より詳しい内容の考察を行い、山口(2018b)の研究内容をより進めたものと位置付けることができる。本稿と山口(2018b)との大きな違いは、次の2点にある。

第1はCalArtsの先進的な教育プログラム評価システムの特徴を考察し、本学のアウトカム・アセスメント構築のための提案を行っている点である。

第2に山口(2018a)では、紙幅の都合上割愛せざるを得なかったCalArtsの先進的な教育プログラム評価システムの具体的な内容や、CT分野の質保証システムの将来像とコンテンツ教育学会の役割のより具体的な提案内容について、本稿で詳述している点である。

以上のような具体的な提案を行った先行研究は、管見の限り見受けられないことから、本稿は一定の独自性があると思われる。

3. CalArtsの概況とプログラムレビューの目的

CalArtsの概況と、本稿で主として取り扱うCalArtsのプログラムレビューの目的について、次で触れる。

3.1. CalArtsの概況

CalArtsは、米国カリフォルニア州ロサンゼルス郡サンタクラリタ市、バレンシアに本部を置く1961年に設立された私立大学である。

元々は専門学校であったシュイナードアートインスティテュート(創立1921年)とロサンゼルス音楽・芸術学校(創立1883年)をウォルト・ディズニーとロイ・ディズニーの先導により、創立された大学である^{*7}。

CalArtsのミッションは、「世界における知識と経験の形を広げ、受け入れられているアイデアに疑問を投げかけ、創造的な可能性に到達するための技術と個人的な意欲を養成するよう、アーティストに教授すること。また、そのアーティストが、現在及び将来の文化の形態において、世界的に重要な作品を創造するよう挑戦せしむること(CalArts, 2016, 3頁)」である。

CalArtsには、2016年において、951人の学部生と496人の大学院生が在籍している。CalArtsは、学位取得のための基幹教育プログラムとして、①アート(22%(全体に占める学生数比率、以下同様))、②ダンス(5%)、③映画/映像(Film and Video)(27%)、④音楽(19%)、⑤演劇(24%)、⑥クリティカル・スタディーズ(3%)を提供し、上記①~⑥の6学部・6研究科を擁している。2016年時点の学生全体の男女比は、42%対58%であり、人種、民族的には白人51%、ヒスパニック系またはラテン系15%、アジア系12%、アフリカ系アメリカ人7%、未申告を含むその他15%と多様である。同年の教員数は、常勤が158人、非常勤が208人であり、学部生対教員の比率は、6.6%である^{*8}。

3.2. CalArtsのプログラムレビューの目的

CalArtsのプログラムレビューの目的は、次のように定められている。

「学生の教育経験(educational experience)を継続的に向上させることにある。これは、それに関連する機能的な情報を収集することを目的とした教員主導の方法によって達成される。収集された情報は、教育的アプローチ、カリキュラム開発、及び管理運営方針を学生のニーズに合致させるために、次の方法で使用される。

- カリキュラムの範囲、深度、厳密さの妥当性を検討すること。
- 教授法、授業形態、及びコース内容の有効性を評価すること。
- 学生の学習に関するディスカッションを計画と資源配分の決定に統合すること。

(CalArts, 2017, 3頁)]

CalArtsでは、上記の目的に基づき、①コースレベル(専攻単位のレベル)、②教育プログラムレベル、③機関(大学全体)レベルの3つのレベルのアセスメントが実施されている。それらの内容を次で考察する。

4. CalArtsのプログラムレビュー

CalArtsのプログラムレビューの特徴について、①実験アニメーション専攻の学習成果の設定の仕組み、②アセスメントツールとしてのルーブリック、③毎年のアセスメントレポート、④プログラムレビューのサイクルと手法という4点に分けて、次で述べる。

4.1. 実験アニメーション専攻の学習成果の設定の仕組み

(1) 実験アニメーション専攻の概要

本稿では、CalArtsの6学部・6研究科のうち、映画/映像学部・研究科の中の実験アニメーション(Experimental Animation)専攻の学習成果の設定の仕組みを中心に取り上げる^{*9}。本稿でこの専攻を取り上げる理由は次の2点にある。

第1に映画/映像学部・研究科の学生数比率は先述の通り、他のそれと比較して一番高く重要な学部・研究科であり、そのうちの実験

アニメーション専攻は、アニメーション作家が「個人」で独自の制作方法を案出することで作品をつくりあげるといった先進的な取組みを実践していることから、CT系大学にとって多くの示唆が得られると考えられる点である。

第2に米国のアニメーション教育の最高峰に位置付けられる重要な専攻であり^{*10}、この専攻では学士課程と修士課程の明確な学習成果の設定の仕組みを持ち、両課程を擁するCT系大学にも参考になる部分が多々あると考えられる点である。

(2) 学生の学習成果の設定

CalArtsでは、すべての学部・研究科における各専攻において、学生の学習成果が設定され、公表されている^{*11}。そのうち、実験

アニメーション専攻の学士課程と修士課程における学生の学習成果は、表1のように設定されている。

ここでは、①創造的発達、②個人の表現、③文脈的知識、④デジタルスキル、⑤コミュニケーションと批判的スキル、⑥プロフェッショナルリズムの6つの観点から設定されている。

これらは、中央教育審議会(2008)で学習成果の参考指針として示されている「知識・理解、汎用的技能、態度・志向性、総合的な学習経験と創造的思考力(12～13頁)」の観点をすべて盛り込んだ内容であり、CT系大学が学生の学習成果の設定を行う際に参考になると考える。

表1：CalArtsにおける実験アニメーション専攻の学生の学習成果

	学士課程の学習成果	修士課程の学習成果
1. 創造的発達	学生は、絵画、アニメーション、映画製作の十分に開発されたスキルを備えた創造的なプロセスを考案し、独自性のある表現の開発を考案する。	創造的な作品のすべての側面において、学生は高度な能力を持つ。学生は熟達したアニメーションや映画制作スキルを開発する。学生の論文のプロジェクトは非常に独自性のある意見を示し、その芸術的な作品は完全に専門的なレベルである。
2. 個人の表現	学生のスタイルは分かり易く魅力的である。学生の作品は、実質的な創造性と独立したアイデアの深い発展を示す。	学生の論文は、情報に通じ、革新的で影響力のあるものである。独創的なアイデアと技術の両者が、独創性の高い作品を制作する際に使用されている。
3. 文脈的知識	学生は、タイムベースド・アートにおける現在の発展を認識し、批判的に論じることができる。また、アニメーションや映画製作の過去の動向を認識することができる。プレゼンテーション、ディスカッション、ライティングにおいて説得力のある形で彼/彼女の作品の歴史的/文化的/社会的文脈に関する彼/彼女の高度な理解を明示することができる。	学生は知覚面での重要なスキルを持ち、芸術界、アニメーション界、そして特にタイムベースド・アートの世界における自分自身の作品の歴史的、社会的、文化的側面を認識し、批判的に論じることができる。
4. デジタルスキル	学生は技術を適切かつ自信を持って適用し、有意義な方法で様々な技術を組み合わせて、望ましい成果を達成する。学生はそのプロセスを説明することができ、また、他の人が問題を解決するのを助けることができる。	主要な技術、機器、ソフトウェア、及びデジタルプロセスを使用する学生の能力は、彼/彼女が他者に教えるように求められる範囲のほとんどを超えたものであること。学生の論文プロジェクトでは高度な理解とイノベーションが明白であること。
5. コミュニケーションと批判的スキル	学生は、他の人の意見に反するアイデアについて説得力を持って主張することができる。学生は聞いたことに耳を傾けて答えることができる。彼/彼女は自分自身の議論において知識を効果的に使用し、他の人の意見を真剣に受け止めることができる。彼/彼女はプロジェクトで他の人たちと一緒に首尾よく協働することができる。	学生は協力者やアドバイザーとして他の人たちと一緒に十分に協働することができ、また、効果的なディレクターであること。
6. プロフェッショナリズム	学生の個人的な作品が期待を上回る。学生はプロフェッショナルなプレゼンテーションを行うことができ、また、プロフェッショナルな作法を理解することができる。学生の作品は目標志向型で体系化されており、学生はプレッシャーのもとでも十分に取り組むことができる。学生は教員と良好な関係を持ち、価値のある情報または助言を同僚に対して頻繁に提供することができる。	プロフェッショナリズムと専門的知識の高さに基づき、学生は他の人たちによって追求される存在であること。また、学生は、幅広いコンタクトを持ち、より大きな芸術界への統合に取り掛かる存在であること。彼/彼女のプレゼンテーションは刺激的であること。彼/彼女は優れたプロフェッショナルな作法を理解し実践することができる。学生は、個人的かつ芸術的な目標を達成することができる。学生は、能率的であり、さらに、プレッシャーのもとでも十分に取り組むことができる。学生は、価値のある情報または助言を同僚に対して頻繁に提供することができ、また、教員との良好な関係を持つことができる。

出所) CalArts (2014)の1～3頁より筆者作成

(3) カリキュラムマップ

CalArtsでは、各専攻で定めた学生の学習成果の達成にどの授業科目が寄与するかを示したカリキュラムマップをすべての学部・研究科の各専攻で定めている。そのうち、「実験アニメーション専攻」のカリキュラムマップは表2のようになっている。表2の縦列に示した授業科目が、表2の横列に示した1～6(この1～6は、表1の学生の学習成果の1～6に対応)のどの学生の学習成果の達成を意図しているかを明確に示したカリキュラムマップになっている。また、このカリキュラムマップは、各授業科目において、どの程度学生の学習成果を達成することができたかをアセスメントする上で非常に重要

であると共に、CalArtsのプログラムレビューの重要な要素の1つになっている。

わが国の大学でもカリキュラムマップを策定する大学は近年増えているが、こうした分野特性に応じた学生の学習成果と各授業科目を対応させたカリキュラムマップは、CT系大学にとって示唆に富むものであると考える。

表 2: CalArts における実験アニメーション専攻のカリキュラムマップ

美術学士 カリキュラムマップ	1	2	3	4	5	6
アニメーション基礎	×	×		×	×	×
ハイブリッドイメージング	×	×			×	×
インターミディエイトアフターエフェクツ	×	×			×	×
アニメーション美術学士の歴史	×		×		×	
サウンド・アクイジション	×	×			×	
デジタルバスとショートプロジェクト	×	×		×	×	×
実験的アニメーターのためのポストプロダクションサウンド	×	×			×	
構造化戦略	×		×			×
映画史 (2)	×		×			
実験アニメーション: 直接的テクニック	×	×		×		×
実験アニメーション: 学部における論評	×	×	×	×		×

美術学修士 カリキュラムマップ	1	2	3	4	5	6
サウンド・アクイジション	×	×		×		
実験的アニメーターのための描画テクニック	×	×			×	×
ハイブリッドイメージング	×	×		×	×	
アニメーションのためのデジタルバス	×	×		×		
初年度の短編映像	×	×			×	×
実験的アニメーターのためのポストプロダクションサウンド	×	×		×		
アニメーションの歴史に関するセミナー	×		×			×
構造化戦略	×		×			×
実験アニメーション論文に関するコンセプトセミナー	×	×	×		×	×
実験アニメーション論文作成のためのセミナー	×	×	×		×	×
自主研究	×	×	×		×	×

出所) CalArts (2014) の 3~4 頁より筆者作成
 ※表 2 横列の 1~6 は、表 1 縦列の 1~6 を指す

4.2. アセスメントツールとしてのルーブリック

CalArts では、学生の学習成果をアセスメントするツールの 1 つとしてルーブリックを用いている。本稿では、そのうち、そのアセスメントツールの代表的事例として、ホリスティック (全体的) ルーブリックとアナリティック (分析的) ルーブリックの 2 つの事例を考察する。

(1) 全体的ルーブリックの事例

全体的ルーブリックの一例として、ライティングルーブリックがあり、それは表 3 のようになっている。全体的ルーブリックは、分析的ルーブリックよりも詳細な内容ではないが、CT 分野のアセスメントは主観的評価が求められる場合が多いため、同分野のアセスメントを行う上で有効的である。全体的ルーブリックは、一般的にアセスメントの基準は示されているが、どのようにその基準を満たすかという点については詳述していない。この意味において、学生は創造的かつ自由な表現を課題に対して行うことができるという利点がある。

(2) 分析的ルーブリックの事例

次に分析的ルーブリックの事例として、CT 分野では、口頭でのプレゼンテーションが特に重要な意味を持つが、表 4 の口頭でのプレ

ゼンテーションのルーブリックの事例を取り上げる。この分析的ルーブリックでは、縦軸に 3 つの評価基準を置き、それに対し「学生が到達しているレベルを示す特徴を記述したもの」を 4 段階に分けて横軸 (評価基準) に置き、マトリクスにしたものを使って学生の学習成果を評価する方法を採用している。テストによる学習成果の評価では、知識や理解度は評価できるが、思考・判断、関心・意欲、態度、技能・表現については評価しづらいために、このような評価方法が導入されている。このようなルーブリックでは、予め評価の基準が示されていることから、評価する側 (教員) と評価される側 (学生) の認識が共有される、また、複数の評価者による評価のズレやブレを防ぐことができる等の長所がある。加えて、学生側も達成度をより明確に理解することができ、教員側も採点時間を短縮できる上に効果的なフィードバックが可能になる利点もある。

以上で述べた事例については、CT 分野において有効性が高く利点があることから、CT 系大学にとって、ルーブリックを開発し運用する際に、有用性があるものであると考える。

表 3: CalArts における全体的なライティングルーブリック

執筆者は優れたライティング能力を示す。執筆者のペーパーは、完全かつ効果的に開発された内容と修辞上の精巧さによって識別される。このカテゴリにおけるエッセイは典型的に:

- ・ 課題の条件を満たしながら、非常に優れた洞察力、視野の広さ、または、独創性をもってトピックに込めている;
- ・ 主なアイデアについて、明確に焦点化され、効果的に体系化され、そして、理路整然と展開されている;
- ・ 具体的な事例と詳細を適切かつ効果的に用いている;
- ・ 言葉遣い、フレーズ、構文の多様性を含む言語の優れた操作を示している;
- ・ 軽微な不備はいくつかあるものの、語法、文法、言語の慣用法の重大な誤りがない。

執筆者は優れたライティング能力を示す。執筆者のペーパーは、上級者のものよりもやや思慮に欠け、あるいは、やや洗練されていないかもしれないが、その内容や展開は確固としたものであり、また、効果的な表現方法を用いている。これらの学生は明らかに及第点のペーパーを書くことができる。

執筆者は、十分な大学レベルのライティング能力を示す。執筆者のペーパーは、内容、展開、または、表現方法において平凡なものであるかもしれないが、その執筆は、執筆者が上級のライティングコースへの準備ができていないことを示すのに十分な能力がある内容であること。文体の不十分さは、執筆者がアイデアを展開し、伝える能力を著しく制限しないこと。

以下のスコアは及第点に達しないことを意味する。

執筆者のエッセイは、不十分な大学レベルのライティング力を反映している。執筆者のペーパーは、内容、展開、または、表現において重大な欠点があり、執筆者がまだ上位区分のライティングを扱う準備ができていないことを示している。文体の不十分さは、執筆者がアイデアを展開し、伝える能力を著しく制限している。

執筆者のエッセイは非常に薄弱なライティングを表している。執筆者のペーパーは、重度の欠点、または、欠点の組み合わせのいずれかによって特徴付けられている。

執筆者のエッセイは、課題に対する最小限の反応のみを示している。このスコアは、主題に対する有意義な応答を行ったり、展開することに失敗している、または、ほとんど支離滅裂な段落を一貫して作成している執筆者のために用意されたものである。

出所) CalArts (2017) の 13 頁より筆者作成

表 4：CalArts における口頭でのプレゼンテーションのルーブリック

口頭でのプレゼンテーション	認め難い	改善が必要	発展途上	格別
内容の質	研究上の欠陥があり、アイデアが独創的でなく、専門分野の学識と関連していない	独創的なアイデアはあるが、研究上の欠陥があり、専門分野の学識と関連していない	専門分野の学識向上に寄与する堅実な研究であるが、アイデアがとても独創的であるようには見受けられない	専門分野の学識向上に寄与する堅実な研究から独創的なアイデアが導かれている
構成と明瞭さ	プロセスと結果が明確にプレゼンテーションされておらず、事例も関連性がないように見受けられ、結論も明確でない	研究プロセスが明確でないが、結果は記述されており、事例に乏しいものの、結論は合理的である	研究プロセスと結果が優良な事例を伴って記述されているが、結論は明確でない	研究プロセスは明確であり、結果は、具体的に要約されており、関連する事例や結論も明確で説得力がある
ビジュアルの有効性	ビジュアルに関する資料が研究に関連しているように見受けられず、また、分かりにくい；学生は質問に答えることができず、また、研究について議論することができない	ビジュアルに関する資料が分かりにくく、グラフィックを用いて説明がなされていない；学生は、研究についてレビューすることはできるが、特定の質問に対して答えることができない	ビジュアルに関する資料が体系化されているが、フォント、色、グラフィックについては、明瞭さが担保されていない；学生は質問に答えることができる	ビジュアルに関する資料が体系化されており、フォント、色、グラフィックが賢明に使用されている；学生は容易に質問に答えることができ、研究について議論することができる
コメント：				

出所) CalArts (2017) の 14 頁より筆者作成

4.3. 毎年のアセスメントレポート

CalArts では、今まで述べたアセスメントをベースに、各学部の各専攻で、アセスメントレポートを毎年度、各学部長に対して提出することになっており、そのテンプレートが表 5 に示したものである。このアセスメントレポートの目的は、教育プログラムや教授法の研究のために、各教育プログラムでの学習成果の発見を文書化することにある。このレポートは各専攻の担当者がとりまとめ、簡潔に

1～3 枚程度の文書にして、各学部長に提出することになっている。これは表 5 に見るとおり、学生の学習、ニーズ、成功に焦点を当てた、まさに、学生の学習成果の設定・評価にフォーカスした内容となっている。

こうしたアセスメントレポートの内容はプログラムレビューにおいて非常に重要であり、今後 CT 系大学が組織的に学生の学習成果の設定・評価を行う際に活用できるものであると考える。

表 5：CalArts におけるアセスメントレポートのテンプレート

年度 学部 プログラム 学位レベル 提出期限 学部長・学科長への提出日
指示 下記の各カテゴリーに沿って、以下をご記入ください 1) あなたの主張を支持する事例 2) あなたが認識した問題がどのように取り組まれているかについての 1 次見解
I. 学生の学習 プログラムアセスメントによる発見（ポートフォリオ、中間在籍時レビュー (mid-residency reviews)、アウトカムベースの課題、コースエバリュエーション等）に基づき、学生は、あなたの教員が期待している学習成果と芸術創造のレベルにおいて、あなたのプログラムの表明しているアウトカムに到達していますか？ (例えば、どの学習成果が最も高いレベルで実証されていますか？ また、どの学習成果が十分に実証されていないといえますか？)
II. 学生のニーズ 学生調査、コースエバリュエーション、及び学生のミーティングやフォーカスグループ等から集められた情報の結果をレビューする時に、何か顕著な、あるいは、テーマ別の問題はありますか？ (例えば、あなたは、驚くべき結果、複数年度に亘って続く問題、複数の関係者からの同様な意見、及び教員の懸念に対して適切に対処した応答等を発見しましたか？)
III. 学生の成功 あなたの学生の入学状況、卒業率、及び在籍率を評価する時に、あなたは、現時点または将来のある時点において、あなたのプログラムのミッションを果たす能力に影響を及ぼす何らかの傾向があることに気づいていますか？ (例えば、高い水準の学生を引き付け、維持し、そして卒業させるあなたの能力に潜在的に影響を及ぼす既知の障害はありますか？)

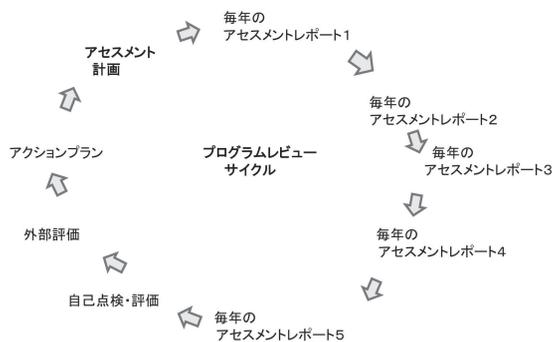
出所) CalArts (2017) の 20 頁より筆者作成

4.4. プログラムレビューのサイクルと手法

(1) プログラムレビューのサイクル

CalArtsでは、これまで述べてきたことを総合した7年サイクルのプログラムレビューを図1のようにまとめて公表している。CalArtsでは、最初の年度にアセスメント計画を確立し、続く2～6年度において、その計画に示されたアセスメントスケジュールに沿った学生の学習成果の評価に基づくアセスメントレポートを作成し評価を行う。そして、7年目に、2～6年目のアセスメントレポートからのデータに基づく自己点検・評価を行うと共に、CalArts以外の同僚(peer)からなる各分野の専門家による外部評価を実施する。特に、7年に1回の外部評価者によるプログラムレビューを行っている点が重要であり、CalArtsでは、このように、学外者の参画を得たプログラムレビューを実施し、評価の客観性・透明性を高め、有効に機能させている^{※12}。

図1：CalArtsにおけるプログラムレビューサイクル



プログラムレビューの7年サイクル	
年度：1 8 など	<ul style="list-style-type: none"> 最初の年度にアセスメント計画を自己点検委員会で確立する 次に続く年度に必要な応じてその計画を修正する。そして、以前のレビューサイクルからのアクションプランを実行する
年度：2-6 9-13 など	<ul style="list-style-type: none"> その計画に示されたアセスメントスケジュールに沿った、学生の学習成果の評価に基づくアセスメント計画を実行する
年度：7 14 など	<ul style="list-style-type: none"> 毎年のアセスメントレポートからのデータに基づく自己点検・評価を行う CalArts以外の同僚からなる各分野の専門家による外部評価の実施 自己点検・評価と外部評価結果に基づくアクションプランの受領

出所) CalArts (2017)の21頁より筆者作成

(2) プログラムレビューのルーブリック

さらに、この外部評価については、表6のようなルーブリックが作成されており、これに沿って、外部評価がなされていることも重要である。外部評価者は、おおむね2～3名で構成され、自己点検・評価報告書を含む書面評価ならびに1～2日の実地調査を行い、その結果をこのルーブリックの観点に基づき、3～5ページの外部評価結果報告書として、CalArtsに対して提示する。

こうしたルーブリックを用いた外部評価の仕組みは先進的であり、今後CT系大学が客観的かつ効果的に外部評価を実施する際に、参考になる有効的な取組みであると考えられる。

5. わが国のコンテンツ系高等教育機関への示唆

CalArtsの取組みの特徴を考察し、CT系大学への示唆を次の3つの観点から導出する。

5.1. 学生の学習成果の設定・評価について

近年のわが国を含む世界の高等教育質保証の流れとして、アウトカム・アセスメントが重要となっており^{※13}、「何を教えたか」ではなく「何ができるようになったか」の評価が重視されている。その流れとして、「教員の視点にたった教育 (teacher-centered education)」から「学生の視点にたった教育 (student-centered education)」への転換が近年なされ、大学は学生が習得すべき学習成果を明確に示すことにより、「何を教えるか」よりも「何ができるようになったか」が重要になってきている。すなわち、各大学は、具体的で、測定可能な学習成果を定めることが求められ、学習成果の評価と結果の公表を通じて、大学の社会に対する説明責任が高まることを期待されている^{※14}。

しかしながら、例えば、2011年度～2015年度の5年間の大学基準協会の大学評価結果(計204大学)において、学位授与方針に学習成果が明示されていない、または不十分であると努力課題として指摘された大学は115大学あり、学習成果の評価指標の開発に着手していない、または不十分であると総評で指摘された大学が135大学あることが知られている(大学基準協会、2016)。

こうした流れの中で、CalArtsでは、本稿で述べてきたように、まず各学部・研究科の各専攻における学生の学習成果を明確に定め、次にその学習成果と各授業科目が連動するように設定したカリキュラムマップを作成した上で、さらに各学部・研究科において、アセスメントレポートとして学生の学習成果にフォーカスした評価を行っている点が特徴的である。

今後CT系大学は、知識・技能・態度等の学習成果を学位授与方針に明確に示した上で、その学習成果を学生が修得したかどうかを把握し、評価することがより一層求められ、そのための評価方法を開発しそれらを適用する必要性に迫られている^{※15}。

CalArtsで行われているCT分野の特性に応じた学生の学習成果の設定の仕方や評価の仕組みは明確であり、また有効性も高いことから、CT系大学がそうした責務に応えていく上で参考にすべき取組みであると考えられる。

表6：CalArtsにおける外部評価の際のルーブリック（外部評価者が使用するためのもの）

基準	未発展	発展途上	十分に確立	格別
目標の到達度	アウトカムがいくつかのケースにおいて専門分野と関連していない	アウトカムが専門分野と関連している	アウトカムが専門分野に関連した知識、スキル、価値に基づいており、そして、規則的かつ組織的に評価され、報告されている	アウトカムが専門分野に関連した知識、スキル、価値に基づいており、規則的かつ組織的に評価され、報告されている。さらに、それがフォローアップされ、プログラム計画に統合されている
カリキュラムレビュー	カリキュラムがいくつかの点において、当該学位に対して不適切である	カリキュラムが当該学位に対しておおむね適切である。そして、カリキュラムはタイムリーに完了できるように設計されている	カリキュラムが当該学位に対して適切である。そして、カリキュラムはタイムリーに完了できるように設計されている。そして／あるいは、カリキュラムは、期待されるアウトカムを達成するために、学生にとって適切な機会を提供している	カリキュラムが当該学位に対して、最新のものであり、また、適切である。そして、カリキュラムはタイムリーに完了できるように設計されている。そして、カリキュラムは、期待されるアウトカムを達成するために、学生にとって適切な機会を提供している
学生の経験	学生と教員間の連携がしばしば促進されていない；学生はおおよそ不満足である	学生と教員間の連携がたいてい促進されている；学生はおおむね満足している	学生と教員間の連携が促進されている；学生は、メンタリング、アドバイジング、学術的なサポート、施設・設備、テクノロジー、インターンシップ、エキシビジョン、あるいは、パフォーマンス機会等の質に対して、おおむね満足している	学生と教員間の連携が促進され、また、円滑になされている；学生は、メンタリング、アドバイジング、学術的なサポート、施設・設備、テクノロジー、インターンシップ、エキシビジョン、あるいは、パフォーマンス機会等の質に対して、非常に満足している
リソースプランニング	プログラムは学部長のニーズを明確に示していない。そして、利用可能な資源を効率的かつ効果的に使用することもなされていない	プログラムはニーズの優先順位付けがなされており、学部長のニーズが明確になっている。そして、利用可能な資源を効率的かつ効果的に使用することがおおむねなされている	プログラムの優先順位は特有の目的やラーニングアウトカムに基づいて、その必要性が規定され、学部長のニーズが明確になっている。そして、利用可能な資源を効率的かつ効果的に使用することがなされている	プログラムの優先順位が、現実的に特有の目的やラーニングアウトカムに基づいて、その必要性が規定され、学部長のニーズが十分かつ適切に明確になっている。そして、利用可能な資源を効率的かつ効果的に使用することがなされている

出所) CalArts (2017) の27頁より筆者作成

5.2. アセスメントツールとしてのルーブリック

米国の大学では、学習成果の評価方法の有効なツールの1つとしてルーブリックが活用され、例えば、レポートの評価、学生の活動や作品・演出・実験の評価、プレゼンテーションやグループ活動の評価などでルーブリックが用いられている^{*16}。CalArtsでも、アセスメントツールとしてルーブリックが活用され、本稿で考察したようにルーブリックを用いたレポートの評価やプレゼンテーションの評価が行われている。

このルーブリックについては、中央教育審議会(2012a)でその重要性が指摘されてから、最近わが国でも注目されつつある。ただし、あずさ監査法人が実施したわが国大学への全数調査(回答数561大学)によると、学習成果の評価方法としてルーブリックを使用している割合は、全体の8.9%にとどまっている。(あずさ監査法人, 2014, 32頁)。また、2012年に中央教育審議会が実施した全数調査(回答数684件)で、ルーブリックの活用を導入すべきか否かという調査がなされた結果、「導入すべき」は149件(21.8%)、「どちらかといえば導入すべき」は280件(40.9%)、「どちらかといえば導入する必要はない」は116件(17.0%)、「導入する必要はない」は38件(5.6%)であった(中央教育審議会, 2012b, 84頁)。このようにわが国の多くの大学がルーブリックの必要性を感じている。

以上のような点に鑑み、今後CT系大学において、CalArtsで実施されているような学習成果の観点・基準を定めたルーブリックの活用の必要性がますます高まり、そのための開発に取り組むことが重要であると考えられる。

5.3. 教育プログラムレビューについて

米国では、自ら提供するすべての教育プログラムについて、体系的にプログラムレビューを実施することが徹底されており、毎年(もしくは2年に1度)の学内でのプログラムレビューと、5～7年に1回、学外者によるプログラムレビューを実施し、評価の客観性・透明性を高めながら、それを有効に機能させている。このように、教育プログラムの質の保証・向上については、第一義的に各大学自らがその責任を負う姿勢が顕著である。また、この「大学自身の質保証を担保する第一義的責任は大学自身にある」という自覚は、国際的共通理解にもなっている(INQAAHE(2016))。

CalArtsでも、2～6年目における毎年の学内でのプログラムレビューと7年に1回の学外者によるプログラムレビューを実施し、特に学外者によるプログラムレビューでは、外部評価者のためのルーブリックを用い、体系的にそのレビューを実施している点が特徴的である。

CT分野の質保証・向上を図る上で、米国で実施されているような学内のプログラムレビューを、CT系大学自らが実施すると共に、CT分野の専門家による外部評価(プログラムレビュー)を実施することが有効であると考えられる^{*17}。特にCalArtsで実施されている学内プログラムレビューの仕組みや、ルーブリックを用いた学外者によるプログラムレビューの取組みは先進的かつ効果的であることから、今後CT系大学がそれらに取り組む際に参考になると考える。

6. 本学のアウトカム・アセスメント構築への示唆

CalArtsの取組みの考察から、本学のアウトカム・アセスメント構築への示唆と提案(私案)を次に導出する。

6.1. 学生の学習成果の設定・評価について

(1) 学習成果の明確化

まずCalArtsでは、学習成果の領域(項目)を設定するにあたって、B.ブルームの提案した「教育目標分類(Taxonomy)」を活用している^{※18}。これは学習成果には、次の3つの領域があることを示したものである(B. S. Bloom (Ed.), 1956)。

- 認知的領域 (Cognitive Domain) (学生は、何を知り、理解できるべきか) : 知識・理解、思考・判断
- 情意的領域 (Affective Domain) (どのような学生であるべきか) : 関心・意欲、態度
- 運動的領域 (Psychomotor Domain) (学生は何ができるべきか)^{※19}

次にその領域(項目)ごとに学習成果を記述する必要があるが、それにあたり、CalArtsでは、図2に示した学習成果を設定する際の基本原則として、学生を主語にした「『学生』+『態度・行動』+『結果のエビデンス』」という基本原則を掲げている。

図2: CalArtsにおける学習成果設定の基本原則

学習成果の設定の際は主として下記の原則を踏襲すること:



出所) CalArts (2017) の5頁より筆者作成

さらにその基本原則を押さえた上で、どのように具体的に学習成果を記述していくかについては、R.メイジャーによって提唱された以下の「ABCD」法に沿って整理することが有効であるとする(Mager, 1997)。

- 主語 (Actor) : 「学生は」
- 動詞 (Behavior) : 「学生は●●を書くことができる。」
- 条件 (Condition) : 「●●を終えた時に、学生は●●を書くことができる。」
- 基準 (Degree) : 「●●を終えた時に、学生は●●の分野で適切な●●を用いて、●●を書くことができる。」^{※20}

そして最終的に学位授与方針に学習成果を記述するにあたっては、達成の検証が可能な課程修了時の修得が求められる知識・能力・態度等の学習成果を明確にすることが重要である。そのための記述法として、以下の「SMART」法を活用することが効果的であるとする(Doran, 1981)。

- Specific (具体的)
- Measurable (測定可能)
- Achievable (達成可能)
- Relevant (有意義)
- Time Scaled (一定の時間内)^{※21}

前述のとおり、学習成果の記述にあたっては、「具体的」に、「測定可能」な表現で、かつ「達成可能」な内容として、「有意義」な成果を「一定の時間内」で修得できることを明確に示すことが重要である。

こうした点に留意して今後本学において学習成果をより体系的に明確化していくことが必要であると考えられる。

(2) カリキュラムマップの作成

本学において、学位授与方針に明示した学習成果を学生が確実に修得できる教育を展開することが必要不可欠であり、また、その学習成果の内容の学生への理解浸透を図ることが極めて重要である。そのための取組みとして有効的であると考えられるのが、CalArtsでも実施されているカリキュラムマップの作成である。

前出の表2で示したCalArtsのカリキュラムマップのように、本学でも、表7で示したような方法で、今後すべての授業科目に、学位授与方針に掲げたすべての学習成果を「対応づける」(mapping)必要があると考える。

表7: 本学におけるカリキュラムマップの作成例

デジタルハリウッド大学及び大学院

カリキュラムマップ作成例	学習成果1	学習成果2	学習成果3	学習成果4	学習成果5
科目A	×				×
科目B		×		×	
科目C			×		
科目D	×			×	
科目E		×			×

出所) 筆者作成

※上記表の学習成果1~5は、例えば、本学の学位授与方針に掲げた学習成果を示すことが考えられる

このカリキュラムマップの作成によって、教員にとっては、各自の授業が本学の定めた学習成果とどのように整合性があるかを確認することができ、また、学生にとっては、どの授業で本学が求める学習成果を修得する機会があるのかが明確に分かるようになるという効用があるため、こうしたマッピング作業が必要であるとする。

(3) シラバスとの連動

カリキュラムマップを作成した後に、必要となる次の作業は、学習成果とシラバスを連動させることである。具体的には、各授業科目で修得を目指す学習成果と学位授与方針との関連性を各シラバスで明示することが必要である。また、図3に示したように、各授業の学習目標(到達目標)が本学の学位授与方針に定めた学習成果のどれに該当するのかを明記することが望ましいと考える。

なお、山口(2017)で分析したように、こうした学位授与方針に掲げた学習成果と授業科目の達成目標の対応関係一覧表を作成し、学生への理解が浸透している点を認証評価で長所として高く評価された大学がある^{※22}。

図3：本学におけるシラバスの作成例

講義名	〇〇〇〇概論
担当教員	〇〇〇〇
学習目標 (到達目標)	1) 〇〇について知り、説明できるようになることを目的とする。 2) 〇〇するために、××について学び、△△を理解できるようになる。 ・ ・ ・
授業概要 (教育目的)	〇〇を講義する。〇〇を説明する。〇〇を明らかにする。 ・ ・ ・

学位授与方針と学習成果との対応関係を明記

出所) 大学基準協会 (2018) の84頁を参考に筆者作成

6.2. アセスメントツールとしてのルーブリック

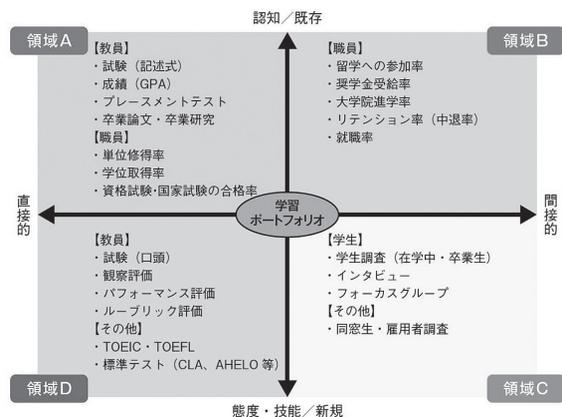
(1) 学習成果アセスメントツール

本稿の冒頭で述べたように、現在のわが国の大学に対して、「学習成果の可視化」が求められている。学生が学習成果を修得できているかどうか、あるいは、学生がどの程度学習成果を修得できているかどうかを的確に把握・測定する(すなわち可視化する)方法は、一般的に大きく「直接評価」と「間接評価」の2つに分類される。

前者は、学生が大学教育を受けることにより直接修得した知識や技能、態度の評価を意味し、後者は、大学教育を受ける学生の学習過程の評価、つまり学生の大学や教育プログラムへの期待度や満足度、学生の学習行動や自己認識等の評価を意味する(江原, 2015, 154頁)。

図4は、学習成果を的確に把握・測定するために、アセスメントする方法が「直接的か間接的か」、そして、その学習成果が、「認知的な領域か非認知的な領域か」の2軸によって整理したものである。

図4：学習成果アセスメントツールの類型(山田 2013)



(2) 学習成果の可視化にとつてのルーブリックの意義

5.1で述べたように、従来大学教育の中心であった認知面に加えて、技能・態度面の育成・評価が求められるようになってきたことを背景に、領域CやDにあるような新たなアセスメントツールの開発がわが国の大学に対して要請されている。

その領域の中で、学習成果を可視化するために、特に近年わが国において注目されているアセスメントツールの1つが領域Dにあるルーブリック評価である。

(3) ルーブリックの開発・運用

では、どのようにルーブリックを開発していけばよいのか。ルーブリックの開発の基本的な流れとしては、主に次の2段階の開発を行うことが有効であると考ええる。

第1段階は、個人でも複数人でもできるが、以下のような開発手順となる(スティーブンス他, 2014, 23-36頁)。

- ① 授業全体の目標と課題の目的や目標を振り返る。
- ② 課題に関する学習目標のリストを作成し、各目標の期待される最高水準の行動を記述する。
- ③ 最高水準の行動を類似するスキルごとに分類し、各グループに共通する見出しをつけ、評価観点とする。
- ④ 評価尺度を何段階にするか決め、不足する行動の記述(評価基準)を補いながら、表形式に整える。

第2段階は、複数人でなければできない作業であるが、パフォーマンス(作品)を持ち寄って互いに検討する作業「モデレーション(moderation: 調整)」を行うことがルーブリックの信頼性を高める上で必須である。下記の手順が、そのグループ・モデレーションの典型例である(田中, 2008, 143頁; 田中編, 2010, 73頁)。

- ① パフォーマンス(作品)を多数集める。
- ② 評価観点と評価尺度について、評価者間で合意する。
- ③ 全作品を互いの採点が分からないように採点する。
- ④ 同じ点数がついた作品に共通して見られる特徴を記述し、記述後(評価基準)を作成する。
- ⑤ 意見が分かれた作品について再評価を行う。

第1段階の開発方法は、授業や課題の目的・目標に基づいて開発する方法であり、教員の授業設計の視点が中心となる。第2段階の開発方法は、実際の成果(物)に基づいて開発する方法であり、学習者の学習状況が反映されやすい^{※23}。

以上のような段階的な開発手法に基づき、今後本学では、CalArtsのルーブリックの事例等を参考に、学位授与方針に示す知識、技能、態度等の学習成果を学生が修得したかどうかを的確に把握し、評価することが重要であり、そのために学習成果を可視化して評価する方法や指標をルーブリックとして、一定の時間と労力がかかるものの、開発しそれらを適用する必要があると考える。

なお、その際には、CalArtsのルーブリックの事例等を本学の中でカスタマイズする必要があり、また、ルーブリックの対象範囲も、全科目を扱うようなものではなく、特定の科目や分野など小さなところから始めていくことが重要であると考えられる。さらに、ルーブリックの評価基準を事前に見せられると、いい点を取るにはどうすればよいかばかりを学生が考えるようになる等のルーブリックのデメリットも指摘されていることから、ルーブリックの利点を活かせるように適切に開発・運用していくことが必要であると考えられる。

6.3. 教育プログラムレビューについて

(1) 毎年のアセスメントレポートの作成

本学における学習成果の設定・評価の質と有効性を向上させるために、学生の学びの向上がどれだけ進展したかについて焦点を当てた毎年のアセスメントレポートを学部と大学院でそれぞれ作成する

ことが有効であると考え。そのレポートのテンプレート作成の際には、CalArtsで実施されているような次の3項目を含むことが効果的であると考え。

- ① 学生の学習成果の実証
- ② 学生のニーズの把握状況
- ③ 学生の成功体験の記述

さらに、上記の項目に加えて、このアセスメント過程を改善するための提案を記載するコメント欄等をそのテンプレートの最後に設けることが有効的であると考え(バーバラ, 2013, 93頁)。

これにより、本学の学部と大学院が定期的にアセスメントを行っていることと、改善への取り組みを行っていることを同時かつ効果的に確認することができる。と考える。

(2) 教育プログラムレビューのサイクル

本学でも、CalArtsで実施されているように、教育プログラムレビューのサイクルを描くことが重要であると考え。CalArtsの事例に即して、例えば、次のような6段階のサイクルを描くことができる。と考える。

第1に最初の年度に全体のサイクルのアセスメント計画を自己点検委員会で策定する。第2にその計画に示されたアセスメントスケジュールに沿った、学生の学習成果の設定・評価に基づくアセスメント計画を学部と大学院でそれぞれ実行する。具体的には、学部では分野ごとの分科会で、大学院ではカリキュラム検討委員会で、アセスメントレポートをそれぞれ毎年作成する。第3に毎年のアセスメントレポートからのデータに基づく自己点検・評価を行う。第4に本学以外の同僚(peer)からなる各分野の専門家による外部評価を実施する。その実施に際しては、CalArtsで活用されているループリック評価を参考に、次の4つの重点項目を中心に審議を行う^{*24}。

- ① 期待される学習成果を学生が達成しているか、また、その達成の程度について、適切に評価しているか。
- ② 学位授与方針に定めた学習成果を学生が達成するために、適切な教育課程が体系的に編成され、適切な水準になっているか。
- ③ 学生の学習教育基盤や学生支援が適切か。
- ④ 教育プログラムの実施における資源配分が適切か。

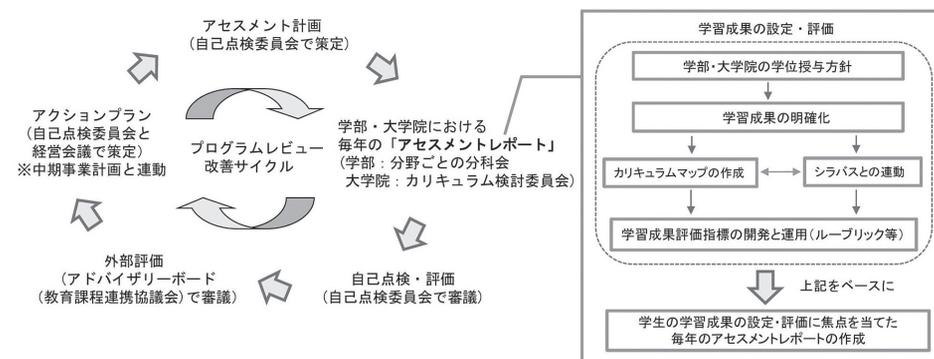
第5に自己点検・評価結果と外部評価結果に基づくアクションプランを自己点検委員会と経営会議で審議・策定し、それを本学の中期事業計画の中に盛り込む。第6に次期のレビューサイクルの冒頭の年度では、必要に応じて最初に立てた全体のサイクルのアセスメント計画を修正すると共に、以前のレビューサイクルからのアクションプランを実行する。

6.4. 本学アウトカム・アセスメントシステムの私案

上記内容を総合して本学のアウトカム・アセスメントシステムを私案として示したものが図5であり、その内容は概要、次の通りである。まずアセスメント計画を自己点検委員会で策定し、次に学部・大学院の学位授与方針に基づいた学習成果の明確化とカリキュラムマップの作成及びシラバスとの連動を行い、さらにループリック等の学習成果評価指標を開発した上で、アセスメントレポートを作成し、その後自己点検・評価と外部評価でそのアセスメントレポートの内容を審議し、最終的に自己点検委員会と経営会議でアクションプランを策定すると共に中期事業計画にその内容を盛り込む仕組みを本学のアウトカム・アセスメントシステムとして提案したい。

これらのプロセスを常に循環させることにより、本学の教育プログラムの水準と質は螺旋状に改善され、より高みに達することが可能になると考える。そして、本学の目指す学生の学びの成長を実現していくために、本学の教職員が一丸となって議論し、学生の学習成果の向上に向けたムーブメントを本学に起こしていくことが今こそ必要であると考え。

図5：デジタルハリウッド大学及び大学院アウトカム・アセスメントシステム（私案）



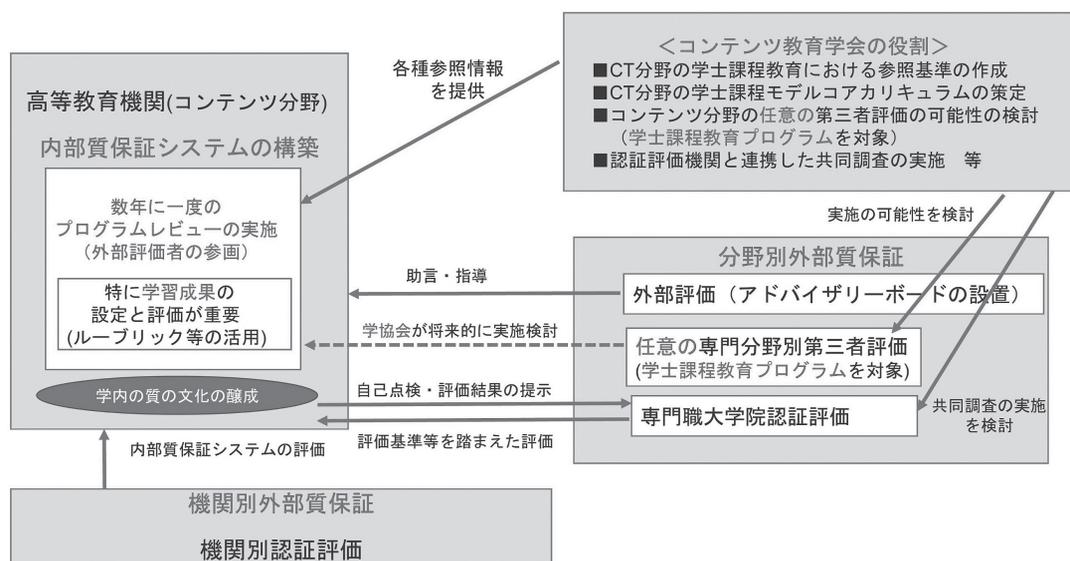
＜デジタルハリウッド大学及び大学院のプログラムレビューの5年サイクル＞	
年度：1 6	-最初の年度に全体のサイクルのアセスメント計画を自己点検委員会で策定する -次期のレビューサイクルの冒頭の年度では、必要に応じて最初に立てた全体のサイクルのアセスメント計画を修正する。そして、以前のレビューサイクルからのアクションプランを実行する
年度：2 7	-その計画に示されたアセスメントスケジュールに沿った、学生の学習成果の評価・評価に基づくアセスメント計画を学部と大学院でそれぞれ実行する
年度：3 8	-毎年のアセスメントレポートからのデータに基づく自己点検・評価を行う
年度：4 9	-デジタルハリウッド大学及び大学院以外の同僚(peer)からなる各分野の専門家による外部評価の実施
年度：5 10	-自己点検・評価結果と外部評価結果に基づき、自己点検委員会と経営会議でアクションプランを策定(中期事業計画と連動)

出所) CalArts (2017)の21頁より筆者作成

7. コンテンツ教育分野の質保証システムの将来像とコンテンツ教育学会の役割

これまでの考察を踏まえて、今後CT分野の高等教育の質保証・向上を推進するために、同分野における高等教育の質保証システムの将来像とコンテンツ教育学会の役割についての提言(私案)を以下で導出する。これらの提言を私案としてまとめたものが図6である。

図6：コンテンツ教育分野の質保証システムの将来像とコンテンツ教育学会の役割(私案)



出所) 林 (2016) 284頁を参照して筆者作成。

7.1. コンテンツ教育分野の質保証システムの将来像

まずCT系大学においては、前述4でCalArtsの取組みの特色を考察し、そこから前述5でCT系大学への示唆を導出したことから分かるように、外部評価者の参画を得たプログラムレビューを実施することが重要である。その際には、特に学習成果の設定と評価が重要となる。

次にUNESCO-CEPES (2007) では、「質保証のための活動は、確固とした質の文化によって支えられる高等教育機関内のメカニズムにかかっている」と指摘されており、また、OECDの高等教育政策レビューでは、「高等教育においてきわめて重要なことは、質を維持向上させるといふ文化を学内に醸成させることである。そのような文化が育てば、高等教育機関のあらゆる行動や選択において質の向上は重要な原則となる。また、教育課程の質を維持し改善することに責任を負わなければならないということがおのずと意識されるようになる」(OECD, 2009, 116頁)と指摘されているように、質に対する学内構成員の意識を高めること(質の文化「Quality Culture」の醸成)が重要であり、質の保証・向上に学内構成員の主体性を発揮させることが重要である。このような観点を重視したCT系大学の内部質保証システムを構築することが重要であると考えられる。

さらに、機関別外部質保証としては、機関別認証評価においてこの内部質保証システムの評価を行い、分野別外部質保証としては、アドバイザリーボード等による外部評価がCT系大学に対して助言や指導を行い、また、専門職大学院認証評価では評価基準等を踏まえた評価を認証評価機関が行うといった外部質保証システムが考えられる。

加えて、専門分野別第三者評価として、現在は、CT系大学の学士課程教育に対する同評価は実施されていないが、将来的には他の学問分野ですでに実施されているような任意の専門分野別第三者評価を実施することを検討すべきであると考えられる。

このような内部質保証システムと外部質保証システムを総合したCT分野の質保証システムの将来像が描けるのではないかと考える。

7.2. コンテンツ教育学会の役割(私案)

今後CT分野の高等教育の質保証・向上を推進していくために、CT分野の高等教育に焦点を当てその質保証・向上を図ることを事業目的の1つとして2016年1月に設立されたコンテンツ教育学会の役割が、CalArtsの事例考察から導き出されたCT分野の質保証システムの将来像の中で、図6に示したとおり、非常に重要な役割を担っていると考える。その観点に立ち、コンテンツ教育学会の果たすべき役割についての提言(私案)を以下で4点述べる。

(1) CT分野の学士課程教育における参照基準の作成

英国QAAによる分野別参照基準について、CT分野に関しては、例えば、Art and Design / History of Art, Architecture and Design等の分野の参照基準がQAAで定められているが^{*25}、これらを参考にして、CT分野の学士課程教育における参照基準を作成することを検討すべきである。また、日本学術会議ですでに策定されている他の分野の参照基準も参考に同基準を作成することも検討すべきである。さらに必要に応じ日本学術会議関係者とも連携して、同基準を作成するCT分野の範囲とその定義を明確に

定める必要がある。加えて、その際には、CT分野ごとの育成すべき資質・能力等を詳述し、CT系大学に対して将来的に情報提供を行うことが考えられる。

なお、英国QAAの分野別参照基準の内容をわが国に導入する際に考慮すべき諸問題については、山口(2018a)において、日英の学士課程教育の構造上の違いを踏まえる必要性や、将来的にCT分野の参照基準が策定された際に、各大学で実際にはどのような活用が図られるのかという課題及びその活用が図られるための戦略や手立てについて詳しく考察を行っている。

(2) CT分野の学士課程モデルコアカリキュラムの策定

NASADの評価基準等を参考に、CT分野のモデルコアカリキュラムを作成することを検討する必要がある。また、わが国の他分野ですでに策定されたモデルコアカリキュラムの内容を参考に、CT分野のその内容を検討することも同時に進めるべきである。さらに、それを将来的に策定した場合、認証評価や任意の専門分野別第三者評価でその充足状況等を確認し、CT分野の高等教育の質保証・向上につなげることを検討する必要がある。

(3) CT分野における任意の専門分野別第三者評価の可能性についての検討

学士課程における任意のCT分野の第三者評価の可能性を検討するにあたっては、まず対象とする専門分野をどこまで広げるのかを定義する必要がある(CT分野の定義の明確化の必要性)。次に国際的通用性に配慮する必要がある。グローバル化の進展に伴い、①国際的通用性のある評価を行うのか、②国際的水準との同等性を求める基準(例えば、NASADの評価基準等)に即して評価を行い、国際的見地から当該教育プログラムを保証するのか、③国際基準への適合・不適合を判断することが可能かどうか、等を検討する必要がある。さらに、その活動を支える人材の確保・育成と財政基盤の確立が不可欠である^{※26}。

(4) 認証評価機関と連携した共同調査の実施

海外のCT分野の評価機関・評価受審大学の実態調査を行うことが必要であると考えられる。例えば、コンテンツ教育学会で、その調査研究成果を前述の3つの役割の課題解決に向けて還元することが今後必要である。また、日本高等教育評価機構(2007)において、すでにそうした実態調査が行われているように、今後、コンテンツ教育学会と各認証評価機関とが連携して共同調査を実施し、その成果をCT分野の学士課程における任意の専門分野別第三者評価や、各認証評価機関における専門職大学院認証評価システム等の改善に還元すること等が必要であると考えられる。

以上のとおり、これからのCT分野の高等教育の質保証・向上においては、CT系大学と共に認証評価機関、日本学術会議、さらにはコンテンツ教育学会等が協働して取り組んでいくことが必要であると考えられる。本稿がそのための一助となり、また、こうした取組みを今後推進する1つの契機となれば幸いである。

【注】

※1

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構(2016)では、学習成果とは、「学生が、授業科目、プログラム、教育課程などにおける所定の学習期間終了時に獲得し得る知識、技術、態度などの成果を指す(24頁)」と定義されている。

なお、大学設置基準等の法令では、基本的に単位につながる「がくしゅう」を「学修」としているが、その成果の習得については必ずしも単位取得につながる正課教育のみで実現されるものではなく、そこには課外教育なども含まれるとの認識から、幅広く「がくしゅう」を捉えて「学習成果」の文言を本稿では用いる。

※2

中央教育審議会大学分科会将来構想部会(2017)ではプログラムレビューを「個々の学生の学修成果や各大学の教育成果を、学位を与える課程(プログラム)共通の考え方や尺度(アセスメント・ポリシー)に則って評価(37頁)」すること、としている。

※3

日本学術会議の下記のウェブサイトには、2018年7月時点で、すでに、経営学から医学分野に至るまで、31の学問分野の参照基準が策定・公表されている。

<http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/daigakuhosyo/daigakuhosyo.html> (2018年7月15日アクセス)

※4

「コンテンツの創造、保護及び活用の促進に関する法律」(平成十六年六月四日法律第八十一号)の第二条の定義によれば、コンテンツとは、「映画、音楽、演劇、文芸、写真、漫画、アニメーション、コンピュータゲームその他の文字、図形、色彩、音声、動作若しくは映像若しくはこれらを組み合わせさせたもの又はこれらに係る情報を電子計算機を介して提供するためのプログラム(電子計算機に対する指令であって、一の結果を得ることができるように組み合わせさせたものをいう。)であって、人間の創造的活動により生み出されるもののうち、教養又は娯楽の範囲に属するもの」と定義されている。

※5

例えば、下記のウェブサイトに掲載されている2015年のQS World University RankingsにおけるArt & Design分野のトップ10大学の中で、CalArtsは第7位に位置付けられている。

<https://www.topuniversities.com/university-rankings-articles/university-subject-rankings/new-ranking-world%E2%80%99s-top-art-schools> (2018年7月15日アクセス)

※6

この分野別参照基準は、英国QAAによる下記のURLから入手できる。
http://www.qaa.ac.uk/docs/qaa/subject-benchmark-statements/sbs-art-and-design-17.pdf?sfvrsn=71eef781_14 (2018年7月15日アクセス)

※7

この記述は、下記ウェブサイトに掲載されている「カリフォルニア芸術大学シアター&ダンス、ドラマ」に基づく。
<https://www.arcint.com/school/993> (2018年7月15日アクセス)

※8

これらの数字は、下記のウェブサイトに掲載されている「CalArts Facts and Figures」に基づく。
<https://calarts.edu/about/institute/facts-and-figures> (2018年7月15日アクセス)

※9

映画／映像学部・研究科には、その他に、「キャラクターアニメーション専攻」「映画／映像専攻」及び「映画監督専攻」がある。

※10

この点については、下記のウェブサイトに掲載されている“CalArts Ranked No. 1 Animation School in U.S.”に基づく。
<http://www.hometownstation.com/santa-clarita-news/education/calarts-ranked-no-1-animation-school-in-u-s-156098> (2018年7月15日アクセス)

※11

下記のサイトに掲載されている“CalArts Student Learning Assessment,”にすべて公表されている。
<https://calarts.edu/academics/office-of-the-provost/student-learning-assessment> (2018年7月15日アクセス)

※12

この点については、筆者によるCalArtsのBrian Harlan氏 (Associate Provost for Institutional Research & Effectiveness) へのインタビュー調査結果に基づく。(訪問日時：2017年10月26日14時～16時、場所：California Institute of the Arts, President's Conference Room)。

※13

この重要性については、例えば、深堀 (2015) を参照。

※14

これらの点の記述については、大学改革支援・学位授与機構 (2016) の「学習成果」の項目に基づく。

※15

これらの点については、大学基準協会において、2018年度からの第3サイクルの機関別認証評価から適用される「大学基準」の「4 教育課程・学習成果」に記載されている。

※16

これらの点の記述は、下記のサイトに掲載されている「大学ポートレート (私学版) 用語辞典」に基づく。
http://www.shigaku.go.jp/p_dic_t012.htm (2018年7月15日アクセス)

※17

大学基準協会 (2015) の31、44頁において、全国のがが国の大学へのアンケート結果より (回答率：49%)、教育プログラムレビューの教育改善への寄与率はどの規模の大学でも極めて高いことが示されている。

※18

CalArtsでは、B. ブルームの提案した「教育目標分類 (Taxonomy)」を参考に、学習成果が設定されている (CalArts, 2017, 5-8頁)。

※19

この記述は大学基準協会 (2018) の80頁から引用。

※20

この記述は大学基準協会 (2018) の82頁を参考に記述。

※21

この記述は大学基準協会 (2018) の80-81頁から引用。

※22

この点については、山口 (2017) の21頁の表9に記載した3つのポリシーで長所を獲得した事例を参照されたい。

※23

このような2段階による開発方法の整理方法は、杉谷 (2016) に基づき記述。

※24

これらの表現については、大学改革支援・学位授与機構「教育の内部質保証に関するガイドライン (平成29年3月31日)」の「プログラム・レビューの自己点検に含まれることが期待される事項例 (29～36頁)」も参考に作成した。

※25

これらの参照基準については、下記のURLを参照。
<http://www.qaa.ac.uk/quality-code/subject-benchmark-statements> (2018年7月15日アクセス)

※26

これらの検討を要する点については、工藤 (2016) を参考に記述。

【引用文献】

あずさ監査法人 (2014). 「学修成果の把握と学修成果の評価についての具体的方策に関する調査研究」報告書。
(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/1347643.htm) (2018年7月15日アクセス)

バーバラ・ウォルワード、山崎めぐみ・安野舞子・関田一彦訳 (2013). 「大学教育アセスメント入門 学習成果を評価するための実践ガイド」ナカニシヤ出版。

B. S. Bloom (Ed.). Taxonomy of Educational Objectives: The Classification of Educational Goals, White Plains: Longman, 1956.

CalArts (2014). CalArts Academic Assessment Plan.
(https://calarts.edu/Portals/0/Documents/FV-Experimental_Animation.pdf?ver=2017-03-14-102500-077) (2018年7月24日アクセス)

CalArts (2016). 2016-17 Factbook.
(<https://calarts.edu/Portals/0/Documents/2017%20FACTBOOK-Final.pdf?ver=2017-08-21-133602-503>) (2018年7月15日アクセス)

CalArts (2017). HANDBOOK FOR PROGRAM ASSESSMENT & REVIEW.
(https://calarts.edu/Portals/0/Documents/Program_Review_Handbook.pdf?ver=2017-03-08-103113-803) (2018年7月15日アクセス)

中央教育審議会 (2008). 「学士課程教育の構築に向けて (答申)」。
(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/___icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf) (2018年7月15日アクセス)

中央教育審議会 (2012a). 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」。
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm) (2018年7月15日アクセス)

中央教育審議会 (2012b). 「学士課程教育の現状と課題に関するアンケート調査」の概要。
(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/___icsFiles/afieldfile/2012/09/10/1325048_11.pdf) (2018年7月15日アクセス)

- 中央教育審議会大学分科会将来構想部会 (2017). 「今後の高等教育の将来像の提示に向けた論点整理」(平成29年12月28日). (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/_icsFiles/fieldfile/2018/01/16/1400115_01.pdf) (2018年7月15日アクセス)
- スティーブンス, ダネル, レビ, アントニア, 佐藤浩章監訳, 井上敏憲・俣野秀典訳 (2014). 『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部.
- Doran, G. T. (1981). There's a S.M.A.R.T. Way to Write Management's Goals and Objectives, *Management Review*, 70, 35-36.
- 大学改革支援・学位授与機構 (2016). 「高等教育に関する質保証関係用語集」(第4版). (http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/publish/no17_glossary_4th_edition.pdf) (2018年7月15日アクセス)
- 大学基準協会 (2015). 『内部質保証ハンドブック』.
- 大学基準協会 (2016). 「内部質保証システムについて(大学評価実務説明会資料)」. (https://www.juaa.or.jp/images/accreditation/pdf/explanation/university/2016/ex_u_16_02.pdf) (2018年7月28日アクセス)
- 大学基準協会 (2018). 『学習成果ハンドブック』.
- 江原武一 (2015). 『大学は社会の希望か—大学改革の実態からその先を読む—』東信堂.
- 深堀聡子 (2015). 『アウトカムに基づく大学教育の質保証 チューニングとアセスメントにみる世界の動向』東信堂.
- 林隆之 (2016). 「9. まとめ: 国内における分野別評価の実施枠組みの提案」大学評価・学位授与機構編『我が国における大学教育の分野別質保証の在り方に関する調査研究報告書』. (http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/1371452.htm) (2018年7月15日アクセス)
- INQAAHE (2016). INQAAHE Guidelines of Good Practice 2016 revised edition. (http://www.inqaahe.org/sites/default/files/INQAAHE_GGP2016.pdf) (2018年7月15日アクセス)
- 工藤潤 (2016). 「大学基準協会は専門分野別評価といかに向き合うべきか」大学基準協会『大学評価研究』第15号, 47-53.
- Mager, R. F. (1997). *Preparing Instructional Objectives: A critical tool in the development of effective instruction* (3rd ed.). Atlanta, GA: The Center for Effective Performance.
- 未来工学研究所 (2009). 『大学の質保証及び学位プログラムの在り方に関する調査研究報告書』. (<http://www.ifeng.or.jp/wordpress/wp-content/uploads/2012/02/kenkyuuhoukoku2009.pdf>) (2018年7月15日アクセス)
- 日本高等教育評価機構 (2007). 「海外におけるファッション系高等教育機関に係る評価機関並びに被評価機関(大学院等)のアクレディテーションの実態に関する調査研究」『認証評価に関する調査研究』94~135. (http://www.jiheee.or.jp/publication/pdf/research_report/h18_monka_jigyoo.pdf) (2018年7月15日アクセス)
- OECD編著/森利枝訳 (2009). 『日本の大学改革 OECD 高等教育政策レビュー: 日本』明石書店.
- 杉谷裕美子 (2016). 「第2部 大学評価の体系化に向けて 第2章 大学評価の展開 第1節 プロセス・アウトカム重視の評価」大学基準協会高等教育のあり方研究会 生和秀敏編『JUAA 選書 15 大学評価の体系化』所収, 東信堂.
- 田中耕治 (2008). 『教育評価』岩波書店.
- 田中耕治編 (2010). 『よくわかる教育評価 第2版』ミネルヴァ書房.
- UNESCO-CEPES (2007). *Quality Assurance and Accreditation: A Glossary of Basic Terms and Definitions*. (<http://unesdoc.unesco.org/images/0013/001346/134621e.pdf>) (2018年7月15日アクセス)
- 山田剛史 (2013). 「連載: 学びと成長を促すアセスメントデザイン(第3回: 認知的側面に偏らない評価指標設定に知恵を絞ろう)」『Between』8-9月号, 32~34.
- 山口豪 (2017). 「認証評価結果からみた内部質保証の現状と課題—デジタルハリウッド大学の内部質保証システム構築への示唆」デジタルハリウッド大学紀要編集チーム『DHU JOURNAL Vol.04』19~24.
- 山口豪 (2018a). 「QAA 分野別参照基準 アート&デザイン 2017年2月(邦文仮訳)」『コンテンツ教育学会誌 Vol.2』26~47.
- 山口豪 (2018b). 「CalArtsのプログラムレビューに関する考察—わが国コンテンツ教育分野の質保証・向上への示唆—」大学基準協会『大学評価研究』第17号, 113~124.

[Paper]

Characteristics of Program Review System at CalArts: Implications for the Establishment of Learning Outcomes Assessment System at Digital Hollywood University

Go Yamaguchi

(Undergraduate Academic Affairs, Digital Hollywood University)

This paper is organized as follows. First, a general view of the recent environments surrounding Japanese universities for the quality assurance and enhancement in content education is provided, and second, previous research related to the relevant fields is surveyed in this paper.

Third, the features of the forward-looking program review system at California Institute of the Arts (CalArts) are analyzed in this paper, focusing on “learning outcomes assessment”, “rubrics”, “annual assessment report”, “program review cycle”, and “external review system” at CalArts.

Fourth, based on the above considerations, a few important clues to improve the program review system at Japanese universities and some significant implications for establishing the learning outcomes assessment system at Digital Hollywood University are proposed in this paper.

Finally, this paper suggests future directions toward enriching the quality assurance system in content education in Japan and recommends several critical roles of “Creative Content Research Association”.

Keywords: Learning Outcomes, Program Review, Curriculum Map, Rubric, Experimental Animation